週刊　毎週火旺日発行　昭和四十年四月廿日第三種郵便物認可　戦旗　第五八号　一九六〇年六月二八日

戦旗

一九六〇年六月廿八日発行
発行所
新宿区東大久保二の一五五
世界労働運動研究所
編集　発行人　鎖木　寮
一部　拾円

万国の労働者団結せよ！
革命的前衛・共産主義者同盟をすべての工場に組織せよ！
共産主義者同盟

闘争を敗北に導く裏切分子日共を
大衆的に追求せよ！

日和見主義者を戦列からたたきだせ！

共産主義者同盟政治局

全国の労働者、学生、人民

わすれてはならない。

安保闘争が、警察法闘争とする右翼的傾向に対し、われわれは労働者の闘争を組織し、と共に、安保闘争は、それ自体としてはなしえなかった。

しかし、安保闘争は、それ自体としてはなしえなかったとしても、それは、ブロレタリアートをはげしくたたかせ、敵権力をゆるがせたのである。

「大衆にたらないといわれは何故か。

その一つの決定的要因は、ひらくものだった。

とくに昨年十一月廿七日と一月十六日われわれは孤立をきりひらいた。

とくに昨年十一月廿七日と一月十六日の二度にわたって、新たな反動分子の裏切りと、安保闘争の指導部に関する最後の切り分子として、岸政府をゆるがした。

安保闘争は、日本の資本家階級が、全国支配貫徹のために

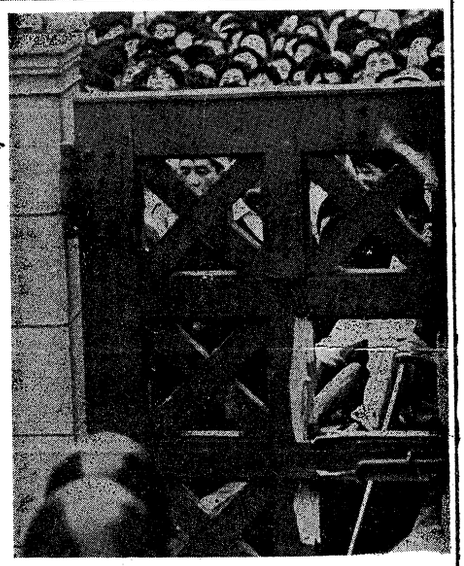
6月15日

左下　「燃えろ／燃えろ／」幾百、幾千の人民の血を吸つた白トラックは、次々と炎上し、醜い残骸をさらけ出した。

左　衆院南通用門前。この中で故樺同志は、敵権力と闘い、支配階級のお抱い私兵どもに、首をしめられ、殺された。

右上　負傷した女子学生をけとばし、髪をつかんで、ひきずる警官隊。資本家から、二億円の安保特別賞與を貰つたかれらは、民衆を見ると、猛犬のように、うなりをあげて噛みついた。

右　資本家が、金で買つた暴力団によつて、仲間達が袋叩きにされた。鉄カブトをかぶつた、制服の暴力団はそれを心地よげに見ていた。「お前らは一体何だ／」デモ隊の憤激は頂点に達した。



最後に

故　樺美智子　遺作（高校三年当時）

誰かが私を笑つている
向うでも　こつちでも
私をあざ笑つている
でもかまわないさ

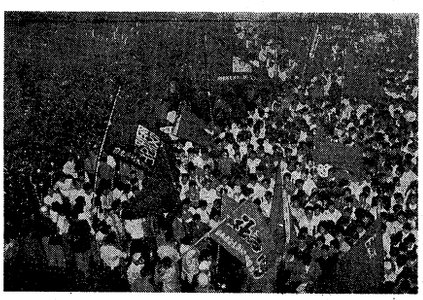
私は自分の道を行く
笑つている連中もやはり
各々の道を行くだろう
よくいうじやないか
「最後に笑うものが
最もよく笑うものだ」と

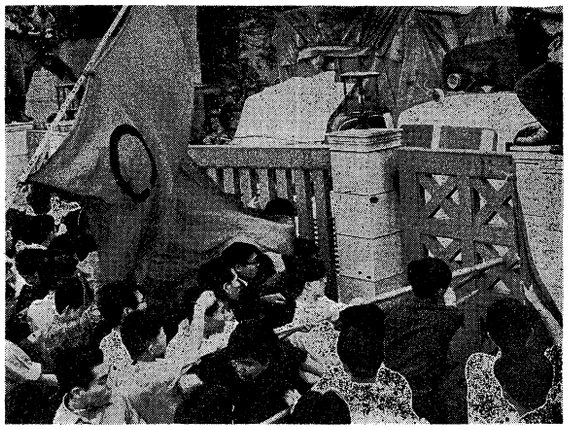
でも私は
いつまでも笑わないだろう
いつまでも笑えないだろう

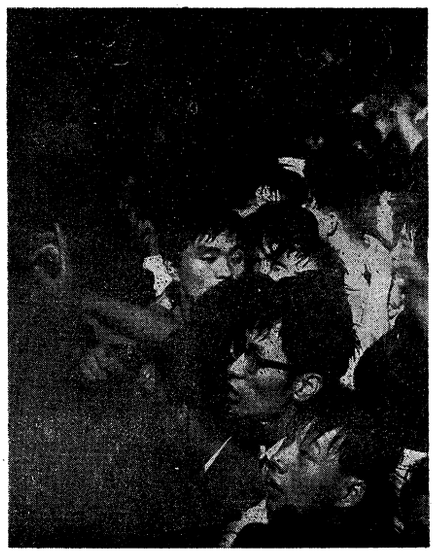
それでいいのだ

ただ許されるものなら
最後に
人知れず　ほほえみたいものだ

六月十五日、この日は日本人民にとつて忘れられない日となつた。怒濤のように国会内におしいつた学生労働者は、政治休戦によつて、人民の怒りをはぐらかそうとした支配階級の仮面をはぎとり、無能無策の味方指導部に痛烈な批判を浴びせた。そして、全人民に資本家社会とはどういうものか、議会とは何か闘いとはどういうものか、をはつきり示し印象づけた。プロレタリア革命の勝利のために、この闘いから、樺さんの死から、あらゆる教訓を導き出そう。







上右　ワッショイ／ワッショイ／見る見るうちに扉が弾かれ、門柱は引き倒され、バリケードのトラックがはずされた。その度に鬨の歌と歓声が湧き起つた。

上中　揺れる赤旗、こだまく警官隊が押し寄せ、たちまちするインター。国会構内乗り込まれ、あたりは血の海になつた。

上左　次の瞬間、津波の如く周囲からグイグイ押してきた。

下左　狂暴な黒いものが、階級の人民決起大会。支配階級は驚きあわてふためいた。

下右　邪魔物はとりはずせ／ホース攻めと、催涙弾の闘争。この一瞬、一瞬を見守つていが始まつた。